

目的 我国の各地に保存、保管されているアイヌ民族服飾資料を、保存科学的並びに服飾文化史的見地から、総合的に研究を行うことを最終目的として、継続的に調査研究を実施している。本研究では、第1報に引き続き、北海道開拓記念館所蔵資料9点について、織物構造上の特徴を明らかにする。

方法 衣服形式の蝦夷錦について、表地の地織部分の織物構造、金属糸、文様部分に用いられている色系の構造について測定した。織物構造因子の測定はJIS-L-1096一般織物試験方法に準じて行い、VH-6110型ハイパーミクロスコープ(KEYENCE製)を用い、接続したCUP-M3型カラービデオプリンターのプリントから測定した。また繊維の形態観察、金属糸の金属箔の厚さについては、採取可能な試料についてのみ生物顕微鏡(ニコンBIOPHOT)、あるいはJSMT-300走査型電子顕微鏡(JEOL製)を用い、SEM像から測定した。

結果 蝦夷錦(山丹服)資料9点のうち、単一種の布で構成されているもの4点、2種の布での構成が3点、3種の布での構成が2点で、全て絹織物である。それらの織組織は、朱子織、変化平織、変化斜文織、からみ織である。厚さ(測定可能な試料のみ)は、0.27~0.40mmで、織糸密度は、たて20.0~150.0本/cm、よこ10.8~60.0本/cmである。蝦夷錦には、鮮やかな文様部分に数種の金属糸や色系が用いられている。金属糸の形態は、ほとんどが絹の芯糸に金属箔を巻いた撚金で、見掛けの直径は、0.15~0.62mmである。金属箔の巻き方向は、全てZ方向で、巻き数8.3~18.9回/cm、幅0.25~0.91mm、厚さ30.8~92.3 μ mである。多種の色系は、ほとんどが引揃えの絹糸で、見掛けの直径0.08~1.07mmで、文様に合わせた糸使いになっている。